

『筑駒』考

井上 正允

『筑駒』考

井上 正允

1. はじめに——筑駒入学前史——

最初から唐突で恐縮だが、次の小学生の作文からこの稿をおこしたい。

「受験勉強とぼく」 小6. T君

三年生の三学期、僕は母につれられて『中野進学教室』という塾の入会試験を受けに行きました。先生方の顔を見たときは、スパルタ教育でもされそうな気がしてなりません。先生のうちの一人が、母となにやら話をしている間に、眼鏡をかけた先生が、「試験時間は一時間20分、君は二教科だから、算数・国語、それぞれ40分ずつ、それじゃついてきて。」とおっしゃって、教室につれて行ってくださいました。

祖父から教わった漢字、計算の仕方などをフルに生かして、目の前の時計で50分たったころ、見直しもせずに教師室に持って行きました。

「早いなあ。1時間以内に持ってきたのは、君が初めてだよ。」

そう言って一人の先生が試験の答案用紙をうけとりました。その一言で、ぼくは“これならどうやら入会できそうだな”と安心しましたが、内心では見直しが充分でなかったことが不安でした。

それから二週間ほどしたころ、通知がきました。結果は、算数95/100、国語90/100という三位の成績で、入会試験に合格しました。

※

※

クラスは、入会試験で入塾できた人の中から点数上位の順に、A、B、Cとわかれています。僕は『4A4』というクラスで最初の4は四学年、真ん中のAはAクラス、最後の4は四教科だということを表します。でも、なぜか入会試験だけは教科が二教科でした。

授業は春休みを終えた新学期からで、『4A4』の中には、同じ三小で同じクラスの友達がいきました。僕はその友達に紹介されてこの塾に入会したのです。それにしても、その時の、その友達のいることによる心強さはたいへんなものでした。僕は転校等の経験がないので、(経験のある人は皆、そう思うかもしれませんが)僕より前に入っていた人達を見て、これから友達として仲良くやっていけるかどうか不安でした。

まだみんなに慣れないうちは、塾内を案内してくれたり、忘れた教科書を見せたりしてくれるのは、同じ学校の友達だけでした。

※ ※

四年生の目標は、まず四進の会員になることでした。四進の正式名称は、四谷大塚進学教室という、僕の通っている中野進学教室（これからは略して“中進”と呼びます）などの小規模な塾の生徒にテストを受けさせ、塾でついた学力の程度を調べるようなところでいわば大きな塾です。勿論、中進にも試験はありますが、せいぜい月に一回程度で、四進は毎週あるのです。しかも四進で良い成績をとった生徒は、その所属する塾の“看板”になるわけですから、先生が四進の試験に力を入れるのは当然です。

四進の週一回テストが始まる少し前の、4年生の12月、四進に通っている生徒を三つに分けるテストがありました。“会員”，“準会員”，“外部生”の三つです。そのテストまでは日曜日も昼までねむれない（？——原文のまま）という特訓が続きました。分からない人は分かるまで、その人だけ残されることになっていて、僕も何度か残されたことがあります。先生に「おまえはこんな問題も分かんのか!? さっき先生が説明したばかりじゃないか。」とどなられました。そのときはとなりの友達が話しかけてきたために、聞こえなかったのです。でもそれを「聞こえなかったのもう一度言ってください。」という勇気がそのときはなく、それがくやしさに変わってそのときから本気で勉強するようになったのです。

その後、そのかいあって、一万三千人余りの中で480位で、また塾の中では3位の成績で、会員に合格できました。

塾長に、母はうれしそうにお礼を言っていました。

でも、この試験が、受験とはたいして関係のないもので、しかも四進の中でもほんの序の口だったなどとはその時の僕には思いもよりませんでした。

※ ※

「正会員になった以上、武蔵をめざしてがんばらなくちゃだめよ。努力すればできるんだから。」

そのころ母、よくこんな言葉を言っていた覚えがあります。“武蔵”とは『御三家』と呼ばれ私立中学のことです。

その後、塾の様子は、というと正会員になれなかったがために、他の塾に移っていく友達もたくさんいました。しかし、他の塾も同じ状況だったらしく、その分多くの友達が入ってきました。人なつっこくてすぐに友達になれた子、おとなしくて目立たない子など様々でしたが、どの子もニックネームで呼べるほど親しくなることができました。

※ ※

『4A4』が、五年生になると『A4』の部分が『選抜』となって、五年生のいちばん上のクラスは、“五年選抜”という名に変わり、さらに六年になると、またクラス名が変わってい

きます。僕はクラス分けテストでは常に十位までの中に入っていました（一クラスは5～12人）から、常にいちばん上のクラスにいました。

順調に進んだ塾生活もつかの間で、5年の三学期の資格審査という試験（この試験で、準会員が正会員になることができ、また正会員はそれ以外のものに落ちてしまうこともある）で、僕は、正会員から準会員に落ちてしまったのです。“五年選抜”クラスの中で準会員は、僕をのぞくとたった一人になってしまったのです。

母から「もう四進やめたら？受験はあきらめなさい。それともまだ続けるの？」と聞かれましたが、そのとき僕は、すぐに返答することができませんでした。

それからは、その迷いのおかげで、なんとなく続けた塾にも全く身が入りませんでした。

塾の担任の算数の先生が、「たった1回の試験だけが悪い成績だったんじゃないか。他の試験の時はいい点数をとっているのに。それに、ここでやめたら今までの努力は何になる。」と言いました。僕自身も、はやめにけじめをつけなければ、金と時間のムダだと思っていましたから、結局はやめずに続けることにしたのです。

※ ※

決心がついてからまもなく、今まで教えていただいていた先生4人のうち、3人がぼくたちのクラスから担当が変わってしまったのです。

そこで、代わりの先生に教わり始めました。今度の先生にはすぐに慣れました。今では（前の先生が聞いたら申し分けないけれども）先生が変わってよかったと思っています。学力はうんと上がって、四・五年のころに欠けていた部分をていねいに教えてもらえたからです。このことによって、ついにドロ沼のスランプからぬけ出すことができたのです。

※ ※

ところで四進では、自分の学力が志望校に合うかどうかを確かめる三つの大きなテストがあります。先生の説明では、一回目がいちばん簡単で、二回目がいちばん難しく、三回目が、ちょうどその中間だということでした。

一回目、二回目と難しくなっていくのに、なぜ三回目は二回目より易しいのかということが不思議でした。そこで自分の考えてみたことによると、最後のテストを難しくしてしまうと、生徒たちの自信喪失があるからではないかということでした。

これは志望校の目安をつける重要なテストですから、先生はこの試験に特に“熱”を入れているようでした。

「三回の試験のうち、二回分は確実にとれ!! 一回分は落としてもいいから。」と、先生が一回目の試験の前日におっしゃいました。

試験会場は、やはり大きな試験だけあって、いつになく監督員の人数が増えていました。問題用紙が封筒の中に用意されているのにはおどろきました。

試験が終わった時は、はっきりいって自信がありました。

試験から一週間ほどして、来た通知を見ると一万四千人余りの中で750位の成績でした。

また、二回目も761位だったので、先生は「三回目は気楽にやってこい。でもだからといって遊んできちゃあだめだぞ。」と言われて何日もたたないうち、三回目の試験の前々日、学校へ来たときから頭痛が続きました。それでも早退せずに、そのかわりに塾を休むことにしました。なにしろ学校は、この六年間一度も休んだことがないのですから。

家で熱をはかってみると、38度をちょっとこえたくらいでした。何度も吐きそうになりましたがすぐにねたため、試験の日の朝は37度ちょっとに下がりました。とはいったものの、試験中に頭がいたくなったりして、結果は一回、二回とは比べものにならないほどのわるい成績でした。

しかし、僕はこのことによって、いかに“コンディション”が大切かを知ることができました。

「夜は、九時までには必ずねること。それと頭が正常な状態にもどるのは、起きてから約3.5時間かかる。睡眠が第一だ。まずねること。」

受験の日は、2月1日で僕は武蔵中学を受けるから、その一週間前から先生がしきりに言い始めたのがこの言葉でした。

※

※

さて試験当日は、父が朝出かける前に「やるだけやってくれば結果はどうであろうといいから。自分で続けたんだから、一生懸命やったらとえだめだったとしてもしかたがない。それじゃがんばってこい。」と一言いきました。

武蔵中学に、受験者5人がそろると、ついてきてくださった社会科担当の先生が、おまもりとして小さな“マスコット人形”をくれました。

算数は、三問中、二問ほどできたつもりでしたが対して（原文のまま）自信がありませんでした。と思った通り、やはり残念な結果に終わってしまいました。

また、たまたま一次試験（抽選）にうかった筑波大学附属駒場中学校も、武蔵中に全力投球したために、全く対策ができていなかったので、落ちてしまいました。

武蔵中学には5人のうち1人だけが合格しました。

中学受験には失敗しましたが、ここでつけた基礎学力を、高校受験に役立て、こんどこそ合格したいと思います。

2. 学校を捨てさせている親と学校を捨てる子……？

このT君の作文をお読みになられたみなさんは、一体どんな感想をお持ちになるだろうか？

文章構成は実にしっかりしていて、T君の苦しく、つらく、長かった三年間の受験生活が克明に記録されている。四谷大塚の資格検査で、正会員の彼が準会員に落とされたときの苦悩の様子や母親や塾教師の励まして立ち直っていく時のさま、受験に立ち向かう彼の必死な姿勢、試験の

たびごとの彼をとりまく人びとの喜びや落胆、彼を塾の“看板”にすべく指導する教師たちの猛烈な支援体制などがみごとに浮彫りにされている。

四谷大塚とそれを取り巻く中小の四進準拠塾との提携システム等がどうなっているのかもT君の文章から十分読みとれる。

三年間の彼の必死の努力も虚しい結果に終り、12才のT君が「貴重な経験やこの三年間で身につけた基礎学力を、高校受験に役立て、こんどこそ合格したい」と自分にいきかせ、自分を落着かせている姿は何とも痛ましくいじらしい。

だが、気になることがいくつかある。テーマが「中学受験」であることを差し引いて考えても、小学校のこと、級友のこと、クラスや担任の先生など……については全く触れられていないことである。語られているのは、塾の成績、ランキング、そして点数・偏差値に完全に支配された本人、塾教師、親の様子である。

彼の綴った文章から、彼にとって「学校が休みたくない場所であった」ことは読み取れるのだが、何のために、どんな楽しみがあって小学校に一日も休まずに通い続けたのかが分からない。「学校」がどういう意味・意義を持っていたのか、是非とも知りたいところである。

「筑駒生」、特に高校生になると欠課時数が1/3を超えないように、適当に授業をさぼることは、高校生を三年間担任した経験でよく分る。しかし、ほんの一握りの例外を除くと、中・高生を問わず「筑駒生」は学校が好きである。友達との軽いおしゃべり、アイドル、ファッション、音楽（ロックからクラシックまで）、ゲーム、麻雀、ガールフレンド、SEX……。休み時間には、ジュース缶を片手にハンバーガーや焼きそばを頬張る。見慣れた光景である。

音楽祭、体育祭、文化祭などの行事に狂い、酔いしれる。各教室でくりひろげられる演劇、展示やクラス合唱も見応え、聴き応えのあるものが多いし、2日間にわたって実施されるオリンピック形式の体育祭も男っぽさが強くうち出された催しとなる。そして、行事のしめくりは「若きいのちのふるさとよ……」の校歌の大斉唱である。

だから、大学の受験競争からはみだしたり、乗り遅れたりした生徒も、中学校・高校生活も目一杯楽しんでいることがわかる。つまり、「筑駒」という学校が彼等にとって大いに意味があり、そこでの生活にそれぞれの意義を見い出しているということになる。

しかし、小学生のT君にとって4～6年生の三年間、「学校」はいかなる意味を持っていたのか。まさか、醒めた一握りの「筑駒生」のように、「高校卒業の資格が欲しいだけ……」というようなことはあるまい。また言って欲しくもない。

実は、T君の5・6年時の担任は筆者の研究会仲間のR先生である。R先生のこの年度の学級は、T君を含めて中学受験者が10名におよんだという。彼は、受験生の母親について次のように語る。

「6年の三学期に入ると早々に、三人の子どもの母親が私を訪ねてきて、“先生、この一月から、受験が終るまで学校をお休みさせていただきます。子どもに集中させるためと、休養さ

せるためなんです。塾の先生からも厳しく言われていますから……。うちの子も合否ギリギリのところなので、ナーバスにさせないようにとのご指導もいただきまして……。”こんなセリフを何回も聞かされました。こうなればほとんど脅迫に近いもので、担任の私は“イエス”以外に解答はありません。」

……中略……

「それにしても、彼らにとってまるで“自己鍛練”する“生きがい”にも似たこの受験期の彼らの生活の有様を、私たち教師はもっと鋭く分析しなくてはならないでしょう」¹⁾

R先生の言葉を待つまでもなく、T君の文章や上記の母親の発言からも推察できるように、事の良否はともかくとして、中学受験のために「学校を捨てさせている親と学校を捨てる子？」がいる。さらにつけ加えていえば、学校には一応通わせるが、学校での友だちとの触れ合い、せめぎあい、あるいは学級やクラブの活動や、学年・学校の行事等をつくりあげ、組織していく中で学びとるもの、またこうした活動をとおしてしか学びとれないものに目がいってないとすれば“本音で学校を無視し続ける親と子”の方が正直であると言えなくもない。

こうしたケースが特別な事例でないことは昨年43期担任団が作成した新入生資料や文化祭の1A展示「受験について」パンフからも十分窺い知ることが出来る。ここである母親の文章²⁾を紹介しよう。

よよいのよいの

1 A. 母

受験が選抜試験である以上、やむを得ないことであるが、ひたすら「入試のための勉強」であった。あの素直な12歳の戦士たちは、家庭での団らんを犠牲にし、家族の一員である手伝いなどの義務も免除さ、冷たいお弁当を不平も言わずに食べ、帰宅は9時という夜間小学校たる塾に雨の日も風の日も通った。他の少年たちが楽しそうに遊んだり、喧嘩をしている日曜日ごとにテストを受け、午後は電話帳より厚い過去問題集にとりくんだ。そして受験用「技術」を身につけた。何が彼らをそうさせているのか。

「ナニカオカシイ、マチガッテイル」と母たちは思っていたが、言葉には出さず行動もしなかった。

6年後にまた「受験」がやってくる。今はつかの間の休息なのか。もしも君たちが「猫の目入試」に疑問を持つのなら、今度は君たちが「変革」を要求するだろう。そうしたら母たちは心より拍手をおくる。21世紀は君たち自身が創るのだから。

四谷大塚や日能研、近頃急激に伸びてきたTAP等の進学塾でどのような指導が行われているかについては『TRIANGL』日能研発行、『合格相談』旺文社発行、『えるべ』四谷大塚編集などの月刊誌に詳しい。中学受験生のための「大学案内」、 「90年度入試のゆくえ？」など、受験

生の親と子が跳びつくであろう話題が満載である。早川裕子やグループワイフ著『ルポルタージュ・進学塾』有斐閣新書、三田誠広著『パパは塾長さん』河北書房新社も、本校に入学してくる生徒たちの受験生活や親の考え方を知る上で大いに参考になる。

気になる問題点のもうひとつは、小学校の3・4年生までは学級委員をつとめるなど学級のリーダーであった彼らの多くが、学級活動や友達関係に背を向けて生活するという事実である。

合格の代償

中1 A. X君

思い起こせば、僕が某A塾の公開模試を受けたのが、3年前の今ごろだったと思う。あのときの僕は、3年後、つまり、今の僕が、こんな所にいるとは思わなかったはずだ。何しろ、筑駒の名前さえ知らなかったのだから……。

それが、5年の5月某B塾に入って受験勉強を始めた。5年はそのうち過ぎ、6年の夏休みの辺りから実力が伸びて、筑駒が、射程内に入った。そしていま、ここにいるという訳である。

こんなことをいうと、周りがびっくりするかも知れない。そう、僕は変わっている。本気でやった期間は、そうそうない。だから、いまはあまり成績が良くなくても、諦めるのは早いと思う。それに、誰だってやろうと思えばどこの学校にでも入れると思う。こんなことは、偏差値がきちんと計算される塾では言いにくいかも知れない。しかし、僕は塾とはちがう。偏差値だなんだといろいろあるが、何ととっても最後に頼れるのは自分の努力だけなのだ、僕は声を大にして言いたい。



話が変な方向に行ってしまったが、いよいよここから本題に入る。

前に、あまり努力しなかったと書いたが、そうは言ってもそれなりのことはやってあるのであり、だからこそ今この学校にいるのである。

話は変わるが、僕が小4のころは「ファミコン」がはやっていた。僕もよくやったものである。

ファミコンは、確かに楽しい。楽しいのだが、その代償として時間を使い、目を使うのである。

この代償と言うものに、注目してほしいのである。これは、この学校のある教官の授業の中でできたのであるが、「夢は常にその償いが伴う」という一つの考えがある。この夢をファミコンに置き換えると、償いとは、その代償にあてはまる。そう、ピタリあたっているのである。そして、僕の受験にも、これはある面で当てはまってしまうのである。

その一つは、もうこの文章の中にも出て来ている。僕はさっき、夢と代償の例としてファミコンを出しただろう。本当は、今一番はやっているもの（もちろん、これを読んでいる君達5、6年の中で）を出せばいいのだが、それが僕にはわからないのである。そう、つまり世の中の

こと（それも、流行など）がわからなくなってしまったのである。それが、友達関係なのである。

僕は、5年の5月に受験勉強を始めたが、それを隠していたにも関わらず（隠す必要がなかったかもしれないが）6年の2学期ごろから、急に友人関係が悪化し（自分のせいかもしれないけど）、卒業時はほとんど友人がいなかった。

原因はよくわからない。しかし、たぶん受験勉強も絡んでいるのではないかと思うのである。

そこで、5、6年の諸君、塾ではまず出してこない、しかし非常に重要な（少くとも僕はそう思う）アドバイスを、僕の受験体験記を終わりにしようと思う。

「受験勉強ばかりでは、絶対良くない」
（傍線は引用者）

これからも、頑張ってください。

文化祭パンフからの引用³⁾だが、もう一編同じパンフからN君の綴った文章を紹介する。

N氏の2月

中1 A. N君

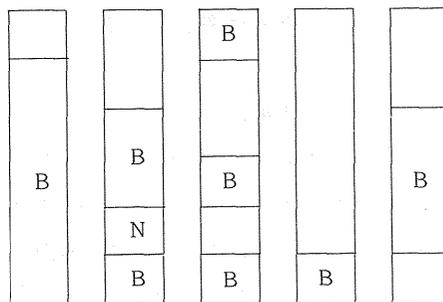
彼（N氏）は、激動の昭和最後の年、一月のある日のひとときに、物思いにふけていた。

「私はもう受験が間近ではないか。ここまで来たら何もすることは無い！某X中とY中とZ中とQ中に合格するぞ！」と心は燃えるのであった。しかし外の空気は彼の心を冷ますかのように冷ややかに張りつめたものであった。

1月31日の朝は、目覚し時計の激しい音で始まった。時計は5時を指している。彼の意志をよそに、無情な音はますます勢いづくかのようにであった。その日彼は、ぼんやりとビデオでも眺めて、何という事もなく次の朝を迎えるのだった。

月が変わった。勝負の時は来た。N氏は燃える……。某X中の校門は、彼が来るのを待ち望んでいたかのように、腕章の人々で波打っていた。彼は、教室に入るとおもむろに筆箱と下敷きを取り出したが、その動きに“心”は感じられなかった。そして彼にはさらなる圧力が待っていたのである。何と彼の周囲には、彼の通っていた塾とは異なる某B塾の生徒によって包囲されていたのである。（図Aを見よ）。ところが彼の心は、敵が多ければ多い程、炎が大きく燃えさかるのであった。そして、勝利を勝ち取ったのである。

図 A



作者あと書き 第一部

こうして彼は見事勝利を勝ち取った訳ですが、皆さんはどうでしょうか。まさかという人が受かったり、まず平気という人が落ちたりということはよく有る事です。問題は精神力なのです。圧力に負けず、自己に打ち勝つ事ができれば合格は手中に収まります。そこで耐え切れない人々は、当然足を踏みはずすのです。

僕は5年から自分の意志^(傍線は引用者)で塾へと通いましたが、親に無理矢理4年から行かされた人など居ないでしょうか。そんな人は最も危険なタイプです。4年からでなくても親に……。という人は考え直して下さい。又、受験を嫌がらないで下さい。受験など人間のするものじゃない、という人もいますが、そんな事はないと思います。文部省は、受験を簡易化しようとしています。それこそおかしな事ではないでしょうか。学校側は受験をのり越えてくる人材を集めている訳で、我々もそれに応えなくてはならないのです。たとえ落ちて世の中の厳しさを知る事で、人間的に大きくなれるでしょう。それにまだまだやり直しの効く歳ですから、思いきって受験して下さい。

来たれ、元気な小学生。

作者あと書き 第二部

第一部では、受験は必要だ、と述べてきましたが、それはその通りです。しかし、受験という制度が塾無しでは成り立たぬこと、そして小学校教育の情けなさにはあきれてしまいます。

まず、塾について考えてみましょう。作者の通っていたN塾は、夏季・冬季・春季講習というものがあり、それぞれ恐ろしくハードなものでありました。とくに夏は朝八時半から夜七時二十分までという、相当無理のある授業でした。それに比べて学校のつまらない事。学校というもの自体は楽しいのですが、授業は全然面白くない。その理由は、①先生が間違った事を教える。②それに反論すれば怒られる。③教える以前に教科書の内容がわからず生徒に聞く。という有様でした。

もはやあきれきってしまう現状です。今、学校も塾も何をやっているのでしょうか。

X君、N君が、筑駒で半年間を過ごし、半年前までの受験勉強を反芻しながら、筑駒を受験しようとしている小5、6年生の後輩たちに送ったメッセージである。

これまで、紹介してきた文章を通して、数年間の中学受験+受験勉強の経験が「彼らの自我意識の形成にどう影響を及ぼすのか」について考えていく必要がある。

自我意識形成の開始期は、小学4、5年生。ちょうど彼らが受験勉強を開始した時期と重なる。それまでの子どもたちは、親や教師が提示し、要求してくることが、自分たちにとっても絶対に「良いこと」「必要なこと」であると疑うことなく受け入れる。つまり、子どもの価値観・行動の枠組みは、親や教師によって決定されると言ってよい。

ところが、この10才前後を境にして、「親や教師はそう言うけれど、本当にそうなのか……？」という疑いをもち始める。友達の考えや行動に触れながら、自分の家と他の家の比較したり、雑誌や新聞・TVなどからのあり余る情報を通して、自分のこれまでの思考や行動の枠組みの中では決して納まりきれないもの、スッキリできないことが吹き出してくる。これが「個」としての私の自覚であり、自我意識形成の始まりである。

この時期に、当然起こるべき疑問や想念を封じ込みながら、学校の中で自分を発揮する場を極端に狭めて、ひたすら「受験」に突破することを目標に、母親との二人三脚（時に父親を含めての三人四脚）で数年間を過ごした子どもたちが、「何を欠いてきたのか」「今、彼らにとって何が必要であるのか」をじっくり見定めながら、本校に入学してきた生徒たちとつき合っていきたい。

3. 「筑駒」生活を散見する ― 入学から卒業まで ―

さて、運よく合格・入学した生徒達が「筑駒」でどう自己形成（自分くずし・自分づくり）を図っていくのかについて観察・考察してみたい。

筆者は、本校着任5年目、37期生を高1から高3まで担任し、昨年は中1から中3まで何時間かずつ数学の授業を担当し、今年の中1・44期生の学級担任・教科担任として今日まで過ごした。極めて限られた経験を通しての現状把握、問題認識であることをおことわりしておく。

いろいろな物議をかもしだし、話題に事欠かなかった37期生であったが、ある部分での「筑駒」らしさ（プラス面もマイナス面も……）が特徴的にあらわれた学年であったと思うのだがどうだろう。

公立中から転任当初、非常に簡素な入学式にまずビックリ。ザワメキあり、笑いあり……とにかく公立中では絶対に経験できない入学式である。入学式に限らず、実に不思議なこと本校の行事・儀式を問わず予行というものが無い。すべて、ぶっつけ本番である。数年間、本校で過ごす内に今までの公立校では予行というどうでもいいこと？に随分エネルギーを費してきたものだと思うようになった。

記念撮影が終り、ホームルーム教室に入った時の生徒達の冷やかな視線をいまだに忘れることが出来ない。中学教師の経験しかない僕自身が、初めて担任する高校生に対して持つ不安、「筑駒」という名前につきまとうある種のイメージや感情などを差し引いても、これまでに経験したことのない異様な出会いであった。（今年の中1の学級開きの様相とは全く異なる。）

僕が話し始めても、横座りして顔だけこちらに向けている者、まわりの友達と小声でささやき合う者、そして新参の教師を値踏みするような目、目、目……。「イヤー、大変な学校に来てしまった」との思いで、簡単な自己紹介と抱負を少しかだけ話して、逃げるようにして準備室に戻ったという記憶が蘇る。

数学Ⅰのオープニングの授業でも、同じような感想を持った。そんな中で辛うじて僕をつなぎとめるものといえば、「筑駒」での第一日目を多分僕と同じような気持ちで迎えたであろう新入

生の存在である。これまで、中学校で受け持った生徒たちが、高校に入学して新たな環境の中でどのように自己形成を図っていくか。僕自身は、彼らに対してどのようなサジェスションやアドバイスが出来るのか。そんなことを考えながら、自分を必死に落ち着かせたものである。

公立中から入学したK君の文章⁴⁾を、ここで紹介したい。

高校に入学して K君

中三のとき、かなり受験勉強をして筑駒に入った。公立中では、いろいろと規則がやかましく、自分の頭で判断して行動するチャンスはあまりなかったが、今度の学校には、規則がゼロに等しいほどないので面白くなりそうである。「ツクコマ」と聞くと、男ばかりの名門校で、皆ペンキョーばかりやっていると思っていたが、中学校から上がってきた生徒は、ペンキョーとペンキョーじゃない部分をうまく区別して余裕があるみたいだった。

いまや、高校はほとんど義務教育化しているけれど、一応形式的には義務教育ではないので、“来たくなければ来なくていい”というような所があって、かえって気分的に楽になり、来るのが楽しみになる。私が見てきたところだけに限って言うと、小・中学校はゼットイニイカネバナラナイトコロであって、学問より、「学校に行くこと」の方が重要であるように思えた。まあ、自我がないうちはともかく、自分で自分だけの世界を持つようになったら、筑駒みたいな学校はいいと思う。

念願かなって高校生になったので、あまり気負わずにやっていきたいと思う。

数Iの授業も、決してうまくは進行しなかった。中学校の三年間の延長線上で考えられる教材や単元も多く、筆者にとってはいちばん教え易い領域であるはずなのだが、基本的なことに時間をかければ、生徒にはそっぽを向かれるし、演習に時間を費せば飽きられるし……、挙句のはてに漫画を読み始める生徒もでてきたりで……。とにかく、しんどい一年間であった。

中学校にいた時には、あまり真面目にやらなくなっていた教材準備に、毎回2～3時間位費やしたりもした。

ただ、中学入試を優秀な成績で突破して、筑駒で中学三年間をのびのびと過ごした内部進学生たちの学力差は予想以上に大きく、全くノートをとろうとしない生徒から、どうでもいいことも含まれている板書事項を隅から隅まで写しとる生徒まで、実に多種多様である。予備校に通いながらも数学がそれ程得意でなく、毎回追試で何とかクリヤーという生徒たちが遅刻の常連であったり、サボリが多かったり、そうなることの言い訳をまくしたてたり……。これまで担任した低学力の生徒との反応のちがいに大いにとまどったものだ。

学級担任として大した仕事も出来ずに、夏休みを迎える直前の何日間かを使って、個人面談を実施した。その中で、ある生徒から「筑駒に来て始めて普通の先生に出会った」とけなされているのか、賞められているのかよく分からない言葉を浴びせかけられたり……。 「ガールフレンド

を紹介して欲しい」とせがまれたり……。

文化祭のデコレーションの内容を決めるのに、クラス中が喧々諤々、喧嘩まがいの議論をしてみたり、一週間後に音楽祭が迫っているのに、朝練習に数名しか集まっておらず、指揮者が「朝練に立ち会って欲しい」と泣きついてきたり、休み時間になると上履きのまま外にとび出しコーラやアイスクリームを買いこんでくる生徒がいたり、教室に燃えるゴミ用、燃えないゴミ用のゴミ箱が設置されていたり、授業が始まったのにガムをかんでいたことを注意すると、紙にも包まずゴミ箱にプツとはき捨てたり……等々、これまでの僕の経験してきた学校常識を超えるものばかりで「世の中に、こんな学校もあったのか！」という驚きで、文字どおり右往左往の毎日を過ごした。

先輩や同僚教師についても触れておかねばなるまい。50歳をとうに過ぎたベテラン教師が夜8時、9時まで明日の授業で使うプリント資料を印刷していたり、職員会議が夜7時近くまで休憩もなしに続くこともしばしばであり、夜あちこちの準備室で繰り広げられる酒宴と尽きない議論、自分の教科の中身の蓄積と自信、プライド、そして何よりもひとりひとりの教師の強烈な個性……。多種多様な価値、右も左も共存・競合しあうという実に不思議な教員社会である。

ここでは、筆者が公立中学にいたときに盛んに言われ、正常な学校生活を維持していくためにはどうしても必要なことと自然に受けとめてきた教師の「共通理解」「同一歩調」という学校スローガンにも全くお目にかからない。各教師が、自分の思想・価値観などを自由にふりかざし、ふりまき、あとは「君たちの判断で……」という具合である。生徒の慇懃無礼な振るまいに、カッとなって時に手を出す教師もいないではないが（私も含めて）、公立校の比ではない。

こんな学校に入学してきた中・高生が、精一杯背伸びしながら6年ないし3年間を過ごす。個性的でプライド・自己主張の強い人間が育っていくことは自然の成り行きといえるのかもしれない。中学2年のT君の「一年間をふり返って」という作文⁵⁾を紹介しよう。

一年間をふりかえて 中2 T君

毎年この時期になると、ぼくは何故この学校に入学したのだろう、とになってしまう。受験とはいったい何なんだろう？ 中学受験での顔がテレビに出てくる。その顔はみんな一様に笑っている。いったい何がうれしいのだろう。

ぼくが受験に合格したとき、はっきり言って中学生活がこんなにでこぼこしているとは思わなかった。だから、その苦しい受験からやっと解放されたという喜びがすごくあった。まさか、このような現状になるとは知らずに……。

ぼくは入学したら毎日、毎日ファミコンをやろうという願望が、毎日、毎日頭の中を駆けめぐっていた。それがどうだろう。入学式の翌日(?)のオリエンテーションでいきなり福岡教頭先生が「これからは、毎日目標をたてて勉強すること」と口元にやらしそうな笑みを浮かべながら言った。瞬時にして、ぼくの願望はもろくも崩れ去り、かわりに頭の中に絶望感がせま

ってきた。しかし、そのお告げを無視していたら成績は悲惨そのもの。入学する前の喜びなど、頭の中にはもはやカケラさえも残っていなかった。

しかし、そのどん底からぼくをはい上らせてくれたのが、今の親しき友人達である。友達にはファミコンよりレベルの高い遊びを教えてもらったり、また勉強のコツを盗んだりもした。

そのうちに、自分が少しずつ変わっていることにも気づくようになり、だんだん学校が楽しくなってきた。それが現在のぼくである。

中学校の受験者たちが、合格によって喜ぶ理由は何だろう？解放されるからだろうか。それとも名門大学への第一歩となったからだろうか？どちらも間違いではない、と思う。しかし、今のぼくだったらこう思う。

「自分が、変化していくから」。

(傍線は引用者)

これは、中学生、高校生だけに主に与えられている特権だと思う。だが、どこの学校にもある権利ではないのだ。この筑駒のような自由な校風で、中・高一貫校だからこそ真似できる(?) 権利なのである。

あと約4年、一生に一回きりしかないこの時間を大切に使わなければならないんだと思う今日このごろである。

今年、中学に入学したY君が「駒場でやりたいこと、抱負、不安、質問、何でもどーぞ」という設問(担任団が作成した自己紹介カード)に対して

「塾でいわれたことだけをやる生活をしてきたので、この駒場の自学自習ということについていけるかどうか心配です」と書いているが、2年後に、T君のように多くのいい友達に囲まれ、「自分が変化していくから楽しい」と言えるようになるのか、じっくり見守りたいものである。

このT君のいう変化こそが、竹内常一氏の言う「自分くずし、自分づくり」⁶⁾のひとつの断面であり、ひとつの自分発見なのである。彼はこれまで身につけてきた一元的尺度である偏差値的価値観を崩し始めている。

1節で述べたように、「筑駒」という学校が、生徒達にとって大いに意味があり、そこでの生活にそれぞれ意義を見い出している。高1のK君の言葉を借りれば「ベンキョーとベンキョーじゃない部分をうまく区別して」中・高6年間を送ることが出来る場所である。

本校の研究報告第29集「本校生の学校生活に関する調査」1989. 生徒部によると、「あなたは本校に入学してよかったと思いますか」の設問に対して「非常によかった」「まあまあよかった」を合わせて、学年によって多少のバラツキはあるものの64~72%という結果が出ている。「学校生活に満足していますか」という設問に対しても、70%近くが「満足している」と応えていること、さらに「何に満足しているか」の問いには「学校での友人関係」「学校での校則・規則」という解答が圧倒的に多い。こうした結果や、K君、T君の作文を通して、「自由・闊達」「駒場の自由」の相言葉のもと、制約もなく、多様な個性の溢れる学校空間の中で、彼らの多くが「どこ

かに自分の居場所を見つけて、生活している」ということになる。

しかし「生徒たちは偏差値的価値観に取り囲まれているし、表に出てこないにしろ、自らの内にしっかりもっている。ぼくは支配的な学校の裏の空気はそういうところにあるんじゃないかという気がする。……その時に自由、自由といっていることは、最後は競争の自由にゆだね、生徒たち個人にゆだねちゃ。そういう自由になる危険がある」（太田政男）「筑駒の場合は自由というのが特徴になっているのは事実なんだろうけど、いま太田さんが言われたように偏差値のトップであった、あるいはあるということにかかわっての自信というか、学校のなかでは劣等感をもって「やはり筑駒の生徒なんだ」ということで支えられて……輝かしい未来の枠のどこかには入るだろうと、そこで片をつけているという感じがする」（小島昌夫）という指摘もある。

このあたりの事情については、別な所⁷⁾で書いたり、発言したり、討論したりしているの、上記の指摘と併せて参照して欲しい。

たしかに、高2も近づく頃になるとそれまでのんびり中学・高校生活を謳歌してきた彼らも大学入試をいくらか気にしはじめ、予備校に通う生活も目立つようになる。偏差値競争に再び足を突っこんでいくのである。しかし、この時点の大学入試に向かう姿勢は、中学入試のそれとは明らかに異なる。また異ならなくては「この4年間、一体何を学んできたのか」ということになる。

高1の3学期に、朝日新聞の投稿（茨城県の普通科底辺校に勤務する花井吉宅氏の「学校蘇生のカギは落第制度」副題「おじゃま虫」の存在認めて対応を というものである⁸⁾ -資料1) をリプリントしてクラスの生徒に配付し、彼らに意見を求めたことがある。その時のM君のレポートを紹介しよう。

花井氏の論文についての感想

高1. M君

自分がこの高校に入ってくる（彼は内部進学生である）ときにも義務教育でない高等学校に何をしに入っていくのか考えたことがあるが、結論を出さないまま入ってきた。出さないままというか、勉強したいという気持ちのないことに少し気付いたけれど、入らなければ世間一般の目からは普通に見てもらえないから無理だろうなあという惰性で結論を出すのを止めてしまったという感じかもしれない。

副題の「学校蘇生の……」という観点からは少しずれるが、今、大学進学について考えていることを書いてみたい。

つい最近までは、自分の学校が進学校と呼ばれ「もちろん目指すのは東大」と言われるのがいやで仕方なく、東大なんかいくものかという思いでいた。でも最近はこう思う。僕は前を向いて生きていきたい。前には何もないうだろう。だから自分で創っていきたい。僕は、将来のために世間受けのいい大学に入ることだけははしないつもりだ。本当に学問をしたい。うまくは言えないが「ああ、今自分はこの大学で学問をしているんだ」と思える大学に入りたい。

もしそれが、東大であるのならば、残り2年間必死に勉強するつもりだ。(彼は希望どおり、2年後東大理1に現役合格した)

花井氏の主張に対して、大まかにはなるほどと思うが、現実には社会人になってからの待遇は、学歴、それもどれだけいい大学を出たかというようなことと関係してくる状況があることを忘れてはいけない。なぜならば、こういうことは、個人という単位では歯が立たないからである。動かしようのない社会背景が、花位氏の言うおじゃま虫を生んでいるかもしれないということも考えて欲しい。もうどうにもならないのかもしれないが……。

M君の「学歴社会」についての認識は、教育社会学者の麻生誠氏の「わが国の場合は、どちらかという、学校で何を学んだかではなくて、どんな学校を出たかを重視する『学歴社会』なのである。そして、この学歴は、入学さえすれば簡単に入手できる仕組みになっている。つまり学歴とは、どちらかというと専門的能力ではなくて、一般的に知的能力水準と、同じ学校出身者という人間的背景とを示しているのである」という指摘と⁹⁾ 相通ずるものである。

この時の生徒レポートは、M君と同様、現在の日本的「学歴社会」のシステムやブランド(銘柄)志向を指摘しているものが多かった。

彼らの父親たちが、企業や官庁の中核にいてこうした日本的体制を支える側にいることも、彼らの認識の背景にあることは疑いえない。

花井氏の文章に対する生徒のレポートを冊子にして学級の保護者会で母親たちに配布して意見を求めた所、7名の母親から意見が寄せられた。その中から二つをここで紹介したい。

高1-4, 母親A

花井氏、井上先生、生徒各自の意見を大変興味深く読みました。

花井氏に対しては、「行き届いた教育体制」を詳述しないがために、多数の生徒に誤解を生んでいるのではないかと思います。本来は、「学習の場」も「生活の場の一つに過ぎない」と氏は考えておられるのであり、大学や高校での「オジャマ虫」の存在も、ありようも容認しておられるのでむしろ生徒たちには歓迎されてしかるべき論と思われるのに、「落第」というジョッキングで、まさに身近かにその恐怖を覚えている一部の生徒(わが子も含まれている!)には、そちらの拒否反応を受けてしまったのかもしれない。

ただ、子ども達全員が、肯定・否定はともかく、レポートで一生涯懸命にこたえている姿勢は好ましく、又高校一年という年齢の割にはかなり掘り下げて考えている一部のレポートには、いたく感心いたしました。

井上先生に対しては有象無象していたわが筑駒37期生に何がしか活を入れて下さる担任であられたことを何より有難く思いました。現に、この投稿文をもとに子供たちの反応までも手刷りにして父母に知らしめ下さったという事じたい、まじめに一年四組のクラス運営を考えて下

さった表われであり、そのことは何よりも生徒自身に響いて、このレポートの回収にも反応があったことだろうと思います。

落第制度の話は、今の臨教審の話し合いの中でも、ある意味での起爆剤となるのではないでしょう。

私自身は、落第制度ときいて、ある体験を思い出しました。かつて子供が小さい頃、アメリカに住む機会がありましたが、帰国した後、日本駐在のアメリカ人の家庭に招かれた折りのことです。食事の最中に日本の厳しい受験制度や子供のことが話題になった時、そのホストとホステスは、もう大きくなった自分の息子や娘のことを、大変に誇らしく（決して、優越感などでなくて……）話し、アルバムまで持ち出しました。写真を指さしながら、息子は、今自動車会社の広告部門でとても生き生き仕事をしている事、家庭を持ち妻と子を愛していること、先日はその家庭で日本の自分達を訪ねてくれる優しいこどもだということ、そして彼は、妹よりも3年遅く小学校を卒業したのだということ……。

とっさに何と合づちを打ったらよいかわからなかった自分でしたが、本人はもとより、良心も「能力の現実」をてらいも、ひくつ感もなく、自然に受け入れる態度に感心させられました。そして、アメリカの小学校では、学年に不相当なとてつもない体格をした生徒が時々まじっていたのを思い出しました。

でも、教室の中は、とても和気合々としていて、「あの子はあれは駄目だけれどもこういうことでは素晴らしい」という個性尊重の気風が、先生をはじめ小さな生徒の一人一人に身につけていたのです。

通信簿でも、良い点は口を極めて評価して、欠点は「彼は、紳士だ。でもまだ小さな紳士だから……」と温かく包みながら指摘して、最後はどんなことにも「私は担任としてあなたが私のクラスにいたのをうれしく、誇らしく思う」と結ぶのでした。

大多数のアメリカ人や、都会以外のアメリカの生活は、日本で考えられているよりもずっと健全で、大らかで、そしてやさしいのです。

話がそれてしまいましたが、花井氏の言わんとすることは、きっと、多様化している個性をそのままに受け入れる方向づけのある教育体制を整えつつ、「入るは易いままに」「出づるを難しく」し、単に学歴のためだけに大学や高校を出てもつまらない。個人個人がその個性と能力に合った教育を受けて、それが受け入れられるような社会の到来に向けて、多方面にわたる日本人の意識改革をねらったものではないかと思われるのですが、これは好意的すぎでしょうか。

ちなみに、私は息子が現実に筑駒で落第してもよし、落第してそれを乗り越えてくれたらもっとよし、と本気で考えている母親です。先生方にも、日頃の授業や試験と連携させつつ、よく、賢く落第制度を活用して欲しいと思っております。

高1-4. 母親B

……前略……我が家でも朝日新聞を講読しておりますので、この両論（花井氏の論稿と、62. 2. 2付朝日新聞・論壇久保田力氏の「本当に大学に進みたいのか」という論稿である）を私も読み、その時感想らしきものを、家族に対し言った記憶が有りますが、いざ問題点をしっかり理解し、それに対する自分の意見を文章にするととなると、大変難しいものである事が分りました。

両論者の意見は、それぞれ納得できる点、できない点があり、生徒の皆と同様、一概に賛成、反対とはいきません。

日本の場合は矢張り、大企業の学歴主義が、この問題の一大原因であろうと思われませんが、民衆の程度に合った政府しか持てないと言われるように、日本は、この程度この形態の教育しか持てないのでは……といささか悲観的な見方もしてしまいます。

先日、NHK 特集の“ハーバード大学のエリート教育”を視ましたが、入学試験、又入学後の勉強振りは、大学とはこう有りたいとの理想像とも見え、日本の大学と対局をなすかのように見えました。

しかし、生活指導等によるエリート意識の植付けは、戦後の平等主義で育った私としては肯定できるものではありませんでした。

その点、生徒の考えは健全であるように思えましたので、これからの教育に悲観的な考えばかりしなくても良いのではとも思いました。

2人の母親の文章を読むと、小学校のR先生のクラスの母親とのちがいがよく分る。もちろん「受験」を目前に控えて……という時期の問題もある。が、いちばんのちがいは、中・高生は母親の期待どおりには動かないし、成長もしないということである。「偏差値信仰」にとりつかれ、受験に向かって二人三脚で必死に歩いてきた親と子の関係が中学・高校の数年間で崩れさるといふ事実である。

花井氏の文章を、子どもは自分の立場で論評するし、親は親として、ひとりの人間として、これまでの経験や知識を絡めながら発言していることが分る。

つまり、「親子関係」もくずし、つくり直されていくのである。

昨年、駒場会報のテーマは「親の子ばなれ・子の親ばなれ」であった。二学期に、教師と親とでこの問題について座談会が持たれたが筆者は、中一と高校生の親の「子どもに向き合う姿勢」がまったくちがうのをその発言から感じとって非常に興味深かった。中一の生徒の親が子どもを包み込む感じで発言していたのに対して、高校生の母親は「子どもは子ども、私は私」「子どもには何とものがっかりさせられてきたから……」など、ひとりの人間として向き合う関係がつけられているように思えた。

37期生を3年間担任しながら、カンニング、飲酒、文化祭のビデオ作品、喫煙、窃盗、麻雀な

どで、何度か家庭謹慎した生徒たちともつき合った。その都度、親たちとも話し合った。

小学校高学年のいい思い出ばかりにしがみついて、「こんなはずじゃなかった」とぼやきながら中・高生活を送っている生徒にも出会った。卒業してからも「あなたの方が、小学生の時は彼よりずっと出来たのに……」と母親から言われるんですよと語ってくれた生徒もいる。

いまになって考えると、高1の時にもう少し何とか適切なアドバイスや指導ができていたならば……と思わないでもない。

処分が下される度に、担任団4人で近くの飲み屋で、やきとりや焼きそばを肴にしながら酒を飲んで、「今後、どうしようか」と溜め息をつきながら話したことを思い出す。

さんざん、彼らも苦しみ、我等担任団を悩ませてくれた37期生も卒業して1年半が経過する。彼らの進路先をここで紹介しておくことにする。90年4月の時点での集計である。

37期生の進路

90. 4. 10 集計

入学生徒数	164		
卒業	161	(3名 中退・大検へ)	
東 京	62	慶 応	20
京 都	6	早 稲 田	16
一 橋	6	上 智	3
横 浜 国 立	3	東 京 理 科	2
大 阪	2	青 山 学 院	1
東 北	2	日 本	1
北 海 道	2	芝 浦 工 業	1
東京医科歯科	2	昭 和	1
東 京 工 業	1	日 本 医 科	1
名 古 屋	1	私立大学計	46
東 京 農 工	1	気 象 大 学 校	1
山 形	1	ワ シ ン ト ン	1
国立大学計	89	ア メ リ カ 大 学	1
就 職	3	連 盟 校	1
2 浪	19	その他の大学計	3
死 去	1		
計	23		

5. 「筑駒」の存在意義について考える

これまで、内部から見た「筑駒」の生活をいくつかの事例をとおして見てきた。これはひとつのエリート中・高生の学校生活の実相である。前節で触れたように万引、窃盗、喫煙、飲酒、その他諸々、これは全国の学校と全く変らない。ただ事件発覚後の対処の方法はいささか異なるのではないか。まず、そのことを取り上げて「脅す」ことは絶対にしない。生徒の弱みにつけこむことは、教師にあるまじき行為だと考えているからである。

ある日曜日に、本郷で数学教育の研究会があり、中央線の御茶の水駅の改札を出た所で喫煙中のA君とバッタリ出会った。彼のまわりには、筆者が担任しているB君、2年の時に担任したC君もいたが、私が近づいていっても全く気付かぬ様子……。肩をポンとたたいたらあわててタバコを捨ててもみ消したがあとのまつり。「明日、担任のG先生に申し出なさい」「はい分りました。ヤバイところ見られちゃったな」「しょうがないよ。こうなったらいさぎよく……」「はい！」という会話を交して、その場は別れた。

ところが、翌朝一緒にいたC君が、小会議室にいる筆者を見つけて「もう、G先生に話しましたか」「いや！まだ！」「先生、担任団のひとりじゃないですか。先生さえ黙っててくれれば……」「もう一回いってみろ！」「何をたわけたことをいってるんだ。フザけるんじゃないヨ」「見つかったら最後、もういさぎよく名乗り出るしかないんだ！」「はい分りました。Aにはそういいます」……。

結局、A君が担任のG先生に昨日の件を話して、彼は3日間の家庭謹慎処分をうけた。これについては後日談がある。学校からの帰路、駒場東大前のホームで煙草をすっていたら、A君とC君がやってきて、「お客さん、ただいまの時間禁煙タイムです。困りますねエ。」……一本とられたのである。

K君は、高2、3年私が担任をした。中学時代は、サッカー部で活躍し、高校では文化祭の中夜祭、高3のステージ班で大活躍した生徒である。卒業式後の生徒主催の「卒業を祝う会」の壇上で一緒に司会をしていたY君に、ジーンズのポケットから、アメリカ煙草の「ラッキー・ストライク」を抜きとられ、「これがKの真実の姿です。でも卒業式が終ったあとだからこれは時効です。」とやられて、担任団一同「して、やられた」と苦笑い……。これは、2年たった今でも、旧担任団が一同に会した時の酒の肴になる。

中学からの本校入学生の中には毎年何名か、小学校時代登校拒否傾向の生徒がいる。しかし、この内の数名は必ず本校にいる間に立ち直る。不思議なことのようにだが、世の中にはこういう子どももいるのである。彼等は、一様に繊細で、秀才タイプだ。気持ちは極めてやさしい。好きなことをやらしておけばどこまでもやり続ける子ども達である。一億総平等化・平均化の時代に、生きにくく、生きづらい子ども達である。しかし、音楽を演奏させれば一級であるし、デザイン、絵画の才能が豊かな生徒もいる。公立の小学校では「何でもできる」ことを理由にいじめられ、

疎外されてきた子ども達でもある。

前にも述べたように、皆無ではないが、現在、中・高合わせて登校拒否気味の生徒2名、彼らだって、たまに学校にでてくれば、友達と楽しそうに語り合っていくのである。

全校で850名(中・高あわせて)程の生徒の中での話である。これは「筑駒」が誇って良いことだと筆者は考えている。たしかに、親の学歴、社会的地位、経済力等はこれまで私が在籍していた公立校より圧倒的に高い。親の我が子に対する期待度も限りなく高い。この辺の事情は、明らかに困難校・底辺校とは異なる。筆者は、前に紹介した花井吉宅氏との私的書簡の中で、「進学校と底辺校の教師とは、職種がちがう」と言われたことがある。この言葉にしばらくわだかまりを覚えていたが、先日、ある大学の先生とのやりとりの中で、「底辺校と進学校の教育は別立てで考えていくべき時代なのですよ。」「あなたの学校で救われている子どもが、底辺校で救われる時代じゃないもの……」「だから、大学受験を軸に中高一貫6年制の中味を考えるのではなく、どこで優秀性を示すかということじゃないのか」と言われて、「ああ、そうなのかなあ」と何となくなんとなくできた気分になった。

今の中1のクラスでも、筑駒の在り方を考えていく上で参考になるケースがいくつかある。四つ程、事例をとりあげながらみていくことにしたい。

一つは、一学期の期末テストの幾何の結果をめぐっての話である。若い講師のD先生のテストの平均点が、100点満点の30点そこそこであった。テストを返された直後に、何人かの生徒と母親から、いろいろ相談や質問を受けた。生徒から質問は、次のようなものである。

S.「幾何のテストが、おそろしく悪かったのだけれど、先生！何かいい参考書があったら教えてください」(母親の質問も似たりよったりの内容であった)

T.「うちの学校の授業に役立つ参考書なんてあるわけないよ。それより、君たちでも十分読みこなせる数学や科学の読み物が沢山でているから、そういうのを2冊でも3冊でもこの夏休みに読んだ方がいい。高校受験がない学校のメリットを最大限生かさなけりゃ……」

これで、彼等が納得したかどうかは分からないが、母親のひとりには、暑中見舞いの添え書きに「先日は、親バカを演じてしまいました。子どもに追い超されそうです」と記してきた。

こうしたケースから考えられる教師のひとつの役割は、「塾ベッタリの親子関係を切断することである」。これは、彼等親子の唯一の価値尺度である「偏差値信仰」を壊すことでもある。

二つ目は、生徒の「How to……」で、何が何でも短時間主義の勉強スタイルを崩すことである。幾何のテストでも生物のテストでも振るわなかったH君は、担任との面接の中で次のように語る。

「先生！筑駒では授業をきちんと聞いていなけりゃ駄目だということがよく分かりました。小学校の時、学校の授業はほとんど聞いていなくても、塾でやっていることだけでトップを維持できました」とのこと。1節のT君の姿と重ね合わせてみると、塾漬けの小学生の問題点が浮かび上がってくる。

第三点目は、「事実を丹念に示していく」ことの大切さである。8月6日に中1生を召集して水田学習の草むしりをした。この草むしり自体は1時間弱で終る作業で、その為だけに召集するのはもったいないということになって、社会科のM先生の提案で、10フィート運動で買い戻されたテーブルを元にして創られた羽仁進監督作品『予言』をみせて、その後一時間程で、広島で被爆した元小学校の先生横川嘉範氏の講演会をもった。

講演会が終わった後で、何人かの生徒に感想を求めたところ、「先生！重いですね」というの返答。別な生徒はしばらく声が出せない様子……。もうひとりの生徒は「こんなすさまじい映画、初めてみました。」の感想。この生徒達の感想と、本校の小林汎氏の「うまく整理した教材を本校の生徒は信用しない。だから出来るだけ丹念に事実を示していくことの方が本校生徒には意味がある」「本校生の弱点としては、ある階層の中に閉じこもり、外との接触がきわめて限られてしまう」の発言を重ね合わせていくと、第三の視点が明らかになる。

第四は、生徒の持っている「個性」や「持ち味」を表面に出させ、目一杯ぶつけあわせることである。中一のホームルームではこれが出来る。これが高校生になるとなかなか難しい。中学校時代に、友人とせいぜい意見を戦わす経験を持たせることで「議論することは楽しい。友達の発言をとおして自分のあいまいさや自分の考えてきたことがはっきりする」ことを知らせたい。このことは、筆者の担当する数学の授業でも同様である。一時間で扱える数学トピックスをひとつ用意しておきさえすれば、生徒同志、生徒対教師の議論が可能になる。一時間で結着がつかなかったら、まだ言いたい人、言いたくない人は「レポートかいて来て……」で、必ず数名の生徒がレポートを書いてくる。教師は、これをリプリントして生徒に配布すればいい。筆者もやっとこんな具合に授業が出来るようになった。

同様のことが、各教科で毎時間毎時間展開されたとき、生徒にとっては大変だけど面白くなかろうはずがない。「嫌いだ。厭だ。」と口ではいいながら生徒は一生懸命考え、議論する。

これ以外に何が必要になるのかは今のところよくは分らない。ただ「自分くずし・自分づくり」の自分くずしは、中学生の内にか何か……と筆者は考えている。公立校の中学生が「高校受験」によって一時中断しなければならないこの作業に本校生はじっくり、ゆっくり取り組むことが出来るはずである。

太田堯氏が「世界」89. 5 特集・学校信仰を考える、岩波書店の中で以下のように述べている。

戦前、戦後を通じて、学校教育制度の中にとりこまれた日本の子どもや若ものたちにとっての、ほとんど決定的ともいべき不幸は、一人ひとりの内面からの「どう生きるか」の問いを奪われつづけてきたことだと私は思う。

どう生きるかの問いは、2つの問いから成り立っているように思う。

- 1) 自分の持ち味は何か。
- 2) それを、社会のどういう仕事を通じて生かすのか。

つまり、他人とのかかわりで言えば、どこであてにされるに値する仕事を果たすか。本人の側

からいえば、どういう社会的出番をみつけるかだ。

この2つの問いが結びついて「どう生きるか」の問いとなる。この問いは、おぼろげながら自分自身という人間の輪郭について見当がつきはじめる思春期に内面から、ほとんど衝動的な情感をともなってほとぼしり出てくるはずのものだ。

この「どう生きるか」の問いを、どのように、どんな場で、どれほど保証できるのかについては定かでない。しかし、このことを頭において、我々教師じっくり、ゆっくり目の前の彼らとつき合っていく必要がある。

結局のところ、現時点ではこの程度のことしか言えない。

- 1) 市川良「小学生の中学受験と進学塾通いの問題」88年度全進研大会資料。小6 T君の卒業論文もこの資料からの引用である。
- 2), 3) 43期1 A発行文化祭パンフ「EXAMINATION」-受験ってなんだったんだろう- 1989. 11
- 4) 37期高一文集「高校に入学して」1986. 6
- 5) 42期2 B文集「1年間を振り返って」90. 3
- 6) 竹内常一「子どもの自分くずしと自分づくり」1987 東京大学出版会
- 7) 井上正允稿「中・高一貫教育を内と外の経験をとおして考える」雑誌「教育」89. 7 国土社
「どこかに居場所のある学校、しかし……」雑誌「教育」90. 7 国土社
- 8) 花井吉宅 朝日新聞論壇62. 2. 2付
- 9) 麻生誠他編「ヨーロッパ・アメリカ・日本の教育風土」1978 有斐閣



花井 吉宅

「教授よりも高級車に通学し、教授を乗せては単位認定をせがむ」「学生運動など論外」「騒々しい授業態度」等

「少年マンガ雑誌ばかり読んでさっぱり勉強しない」「大学教員の友人もよくいう。」「教授よりも高級車に通学し、教授を乗せては単位認定をせがむ」「学生運動など論外」「騒々しい授業態度」等

一月六日付本欄「本当に大学に進みたいのか」に共感。その無目的な懈怠さによって大学教員久保田力氏をして嘆かした、あまたの「おジャマ虫」のことが目に浮かぶ。

大衆化されるに及んで「真の学生でない学生」が目立つようになつてきたに過ぎない。久保田氏の論法を、高校にスライドするなら、「受験生に諸君、お願いだから中学まで世の中を愛するのために勉強せよと要求したり、組合に加入もせずカンパすらしないくせに、ベアだけはちゃっかり受け取る教員のずうずうし

さを嘆くのと似ている。受験生・大学生の軽薄さ、打算的生き方は今日の日本の社会・精神構造の全体的な腐敗のほんの一端に過ぎない。三十年前、私が受験生・大学生だったころは生活に余裕もなく、今よりずっと少数であったために目立たなかつただけのことだ。物と力本と時間が豊富になり、高校や大学が

ともなく、逆に、摘みこられてきた。しかし、学歴だけは不可欠、という現実ないしは神話におびえて進学してくるところが「最高学府」にいくらか回されただけに過ぎない。久保田氏の嘆きは、世上、「底辺校」といわれる高校にいる教員から見れば、まだせうといえる。今や、学校の概念を根本的に改める必要がある。学校が、「学習の場」という考え方を否定するつもりはないが、それ以上に広く深く「生活の場の一つに過ぎない」ととらえるべきである。スポー

ツやマイジャン、アルバイトなどへのめり込むようになつて、学問・技術習得の一定のレベルに達しなければ容赦しないとあら

（公立高校教諭、茨城県在住）

投稿

「おじゃま虫」の存在認めて対応を

学校蘇生のカギは落第制度

は、いつまでも卒業させなければよいのだ。先ごろ、日本の教育に対する米國調査機関からの分析結果が公表され、日本の大学生は極めて不勉強で、四年間は時間の浪費というような指摘がなされた。正鵠(せいこ)を射たものではあるが、米國でも年間二百冊の学術書を読まず大学もあれば、日本の中学生の学力程度の大学生もあまたいる大学であるのだ。要するに、底辺高校がそうであるように、それぞれの大学で「おジャマ虫」の存在とありようをまず容認する。その上で、マスプロ教育に終止符を打ち、落第制度を熟考し、実施する。学校が「生活の場にして学習の場」として蘇生(そせい)するか否かのカギは、行き届いた教育体制と表裏をなすこの落第制度にある。